

21世紀を担う子どもたちを育むための学校図書館教育

—たくましく生きる心と豊かな創造性の育成を目指して—

平成17年10月13日(木)・14日(金)会場／富山県教育文化会館・富山県民会館

この大会の主催は、社団法人全国国学校図書館協議会(以後、全国SLA)および北信越地区と富山県学校図書館協議会です。全国SLAは、学習指導要領が拘束力をもつ告示とされ、学校図書館が必要ではない系統学習を中心とした教え込ませる教育が始まる昭和33年、それ以前の体験学習を中心にした自由で創造性にあふれた教育の時代に設立された民間教育団体です。富山県SLAの事務局は持ち回りで高校の学校図書館に置かれ、その高校の図書館部会に所属される先生方や高校司書の方々に運営されています。このSLAの大きな大会のシンポジウムで、富山図書館を考える会事務局の江藤がパネラーを勤めてきました。お話があった時点から、図書館の専門性をもった学校司書の応援になる発言をしたいと思い、それを目標に務めさせていただきましたが、それが果たせたかどうかは、心もとないばかりです。

昨今の文部科学省を中心としたあわただしい動きの詳細を知りたくて、充実した内容の大会の中でも特に注目したのはSLAの事務局長の笠木幸彦氏の基調講演「学校図書館の現状と課題」でした。笠木氏は「現在は学校図書館にとって今までの働きかけが日の目を見た、追い風の吹いている時期である」と始められ、「2001年の子ども読書推進法から司書教諭の配置、そして2005年の文字・活字文化推進法の成立により、学校の運営に学校図書館が位置付けられる環境の整備は整った」と述べられました。「この追い風をより確かなものとしていくためには、OECDの読解力低下の結果を早急に判断せず、学校図書館を使った授業の積み重ねを行っていただきたい」と、会場の学校関係者に訴えられました。

さて、もっとも聞きたかったのはその後の話の文部科学省から予算要求された平成18年度概算要求関係事項の中の「第8次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画の策定と実施」について、「学校図書館支援センター推進事業」です。定数改善計画は、確かな学力を育成し、生きる力をはぐくむための少人数教育の充実を図るとともに、学校現場の諸課題に対応した柔軟な学級編制を実現するために平成18年から22年までの5年計画で実施され、初年度は1,000人の改善を図るというものでした。簡単に言ってしまうと、少人数教育を推進するためや不登校、発達障害児への支援などのために現場にいる教員を増やすということで、学校図書館に関しては、以下の内容です。

改善事項	改善総数	内容	18年度要求数
読書活動推進のための司書教諭の配置	1,027人	小学校24学級以上×0,5人 中学校21学級以上×0,5人	205人

笠木氏の説明では、県内でだいたい大規模校2校に1名ずつの図書館専任の司書教諭が配置されるということで、5年間で1,027人の専任司書教諭が全国に誕生するということでした。学校司書と専任司書教諭との協働での学校図書館運営が行われ、事例を積み重ねていくことを願わずにはられません。

また、同じく18年度より、全国36の指定地域において、学校図書館のあり方についての調査研究を行う学校図書館支援センターが教育センターなどに置かれるようです。事業内容にある学校図書館支援スタッフと各学校に配置される協力員がどのような立場の方に任せられるのかなど、県内で実施されれば関心を持って見ていきたいと思いました。